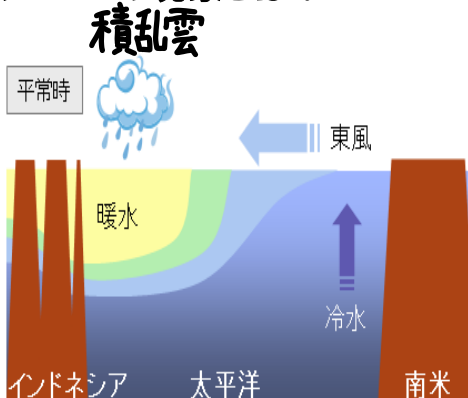
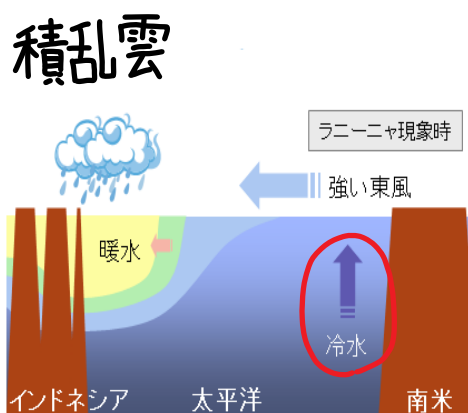


## ラニーニャ現象とは？



ラニーニャ現象は太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸(ここをエルニーニョ監視海域と呼びます)にかけて海面水温が平年より低くなり、その状態が1年程度続く現象です。反対に、同じ海域で海面水温が平年より高い状態が続く現象は、エルニーニョ現象と呼ばれます。



左の図にあるように、ラニーニャ現象が発生している時には、東風が平常時よりも強くなり、西部では暖かい海水がより厚く蓄積します(黄色の部分)。一方で、東部では冷たい水の湧き上がりが平常時より強くなります(赤い丸で囲った部分)。このため、太平洋赤道域の中部から東部では、平常時よりも青色の範囲が広がっており、海面水温が平常時よりも低くなります。インドネシア近海の海上では積乱雲がいつそう盛んに発生します。

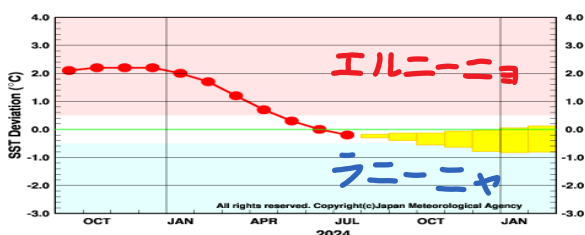
また、日本付近では、夏は猛暑など厳しい暑さの日が増え、反対に冬は寒気が南下して気温が低く大雪になる傾向があります。

[気象庁 | エルニーニョ/ラニーニャ現象とは \(jma.go.jp\)](http://jma.go.jp)

## 今後のラニーニャ現象について

左下のグラフは、海面水温の基準値からの差をその月と前後2か月を含めた5か月間の平均をとったものです。このグラフによると海面水温が徐々に平均より下回る傾向となっているため、エルニーニョ監視海域の海面水温が冬には基準値より低い値で推移する可能性があると考えられます。今後冬にかけてラニーニャ現象時の特徴が顕著になるものの、その状態は春にかけて長続きしない可能性があるため、ラニーニャ現象が発生する可能性は50%~60%程度といえます。

昨年の暖冬とは違い、今年の冬は平年並みの冬か寒冬になる見通しです。冬用コートや手袋の準備、カイロなどの備蓄用品を再確認したり、大雪に備えて車のタイヤを冬用に変更したり、チェーンを用意したりしましょう。早めの寒さ対策や大雪対策を行うことが必要です。



エルニーニョ/ラニーニャ現象の発生確率 (気象庁)	
月(平均期間)	発生確率(%)
8月(2024年6~10月)	100
9月(2024年7~11月)	70
10月(2024年8~12月)	50
11月(2024年9~2025年1月)	40
12月(2024年10~2025年2月)	40
1月(2024年11~2025年3月)	40
2月(2024年12~2025年4月)	50

■エルニーニョ現象 ■平常 ■ラニーニャ現象

[気象庁 | エルニーニョ監視速報 \(jma.go.jp\)](http://jma.go.jp)